
思い出(アイン×ヒトミ)

枯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出（アイン×ヒトミ）

【Nコード】

N1481B

【作者名】

枯葉

【あらすじ】

記憶を失ったアインと、彼を助けたヒトミの交流

「父さん、アインは？」

学校から帰って来るなりヒトミは父に聞いた。

「彼なら、仕事に出掛けたぞ」

「そう。なあんだ、せっかく手合わせしてもらおうと思ったのに」
ほんの少し頬を膨らませ、勢いよくソファに腰を降ろす。

そんな娘を見て父が微笑む

「すっかり彼が気に入ったようだな」

ヒトミは少し顔を赤らめた。

「そんなんじゃないわっもうっそれを言うなら、父さんだってそうじゃない」

「まあな…だが、余り深入りはするなよ」

「え？」

「彼には、思い出せないが重大な何かがあるようだ。遠からず彼はここを…」

「父さんたら考え過ぎよ、そーだっ料理の支度するわね」

早速準備にとりかかる。

ヒトミは料理が趣味で、特に日本食が上手だった。

彼女はドイツ人の父と日本人の母の間に生まれたハーフで、日本食を作るのは日本人の母に習ったからだった。

それで母の故郷である日本の料理をよく作るようになっていた。

（もちろん日本食のレパートリーは、

独自に覚えたものもあってかなり増えていた）

料理を作りながら、ヒトミはアインの事を考えた。

父と二人でよく修行しに行く、シュヴァルツバルトの森に倒れていた彼。

発見も早く命に別状は無かったものの、彼は記憶を無くしていた。

生まれた場所も、家族がいたのかさえも、そして自分の名前も何もかも――

父と二人で夕食をとった後、
ヒトミはいつ彼が帰って来てもすぐご飯が出せるように待機していた。

「アイン遅いなあ…」
ぽつりと呟く。

本当は、このぐらいの時間になるのはいつもの事なのだけれど慣れない。

もう少し待って、彼の仕事が終わるか終わらないかの時間になったのを見計らい、

ヒトミはこっそりと家を抜け出した。

向かった先は、彼が働いている一軒のバーだった。

「こんばんはマスター。アインいます？」

「おや、また道場の娘さんか」

テーブルを拭いていた恰幅のよい男が答える。

「彼なら奥だよ。しかしこんな遅くに若い娘が一人で出歩くもんじゃ…」

「ありがと、奥に行かせてね」

さっさと奥へ歩いて行く姿を見て、彼はやれやれと肩をすくめた。

「アイン」

目的の人物を見つけて、彼に向かってひらひらと手を振る。

「ヒトミ…」

「遅いから心配になって、迎えに来たわ」

無邪気な笑顔に、アインと呼ばれた青年がはあっと溜息をついた。

「また抜け出して来たのか、何かあったらどうする！」

「平気よ、そんなに遠く無いし、私、それなりに強いんだから」

「そう言う問題じゃない、お父さんに怒られるぞ」

心配してたのに・・・と、ヒトミはわざとらしく頬を膨らませてそっぽを向く。

「分かったわ、じゃあ帰ります」

ぷいっと後ろを向いて進もうとして、かけられる言葉を期待する。

「待て。：悪かった、もう少しで終わるから待っててくれるか？」

「うんっ」

先程とはうって変わって満面の笑みで振り向く。

アインが頭を抱えた。

そして帰り道。

「ねえ、アイン」

「何だ？」

「まだ、何も思い出せない？」

「：ああ」

それを聞いて、ヒトミは少しほっとする。

（あれ？どうしてほっとするの？）

「そっか。でも無理に思い出さなくて大丈夫よ、父さんはあなたの事気に入ってるの、

記憶が戻るまで：ううんっ戻ってもちゃんと帰る場所があるって分かるまで

ずっとここにいればいいわ。それに」

顔が少し熱くなる

「私もアインがいてくれたら心強いもの、いなくなるかもって考えると寂しいわ」

「ありがとう。ヒトミにも、君の父さんにも本当に感謝しているさ。だが」

忘れてはならない誰かや出来事があつた筈。

「このままではいけない気がする」

「アイン…」

彼の腕にそつと腕を絡ませて頬を押し当てる。腕を組むのは初めてだ。

アインはと言うと、少し驚いたようだった。

「ふふっびっくりした？」

すると彼はヒトミの意に反して微笑んだ。今まで見たことが無い程、優しい顔で。

ヒトミの胸がざわついた。

「…不思議だな、何だか懐かしい。前にも…」

その時ヒトミが感じたのはいけないっと思う思いだった。ぱつと腕を放す。

「アイン、お願いがあるの」

「うん？」

「記憶が戻ったとしても…帰る場所が分かって…黙って何処かに行っちゃ嫌よ」

ヒトミは歩く速度をもっと落とした。

二人でいるこの時間が好きだったから。

アインも歩くのが遅くなった事にもちろん気付いているだろうが、それに関しては何も言わずに歩調を合わせてくれた。

「生憎だが、俺が帰る場所は、今の所一つしかない」

「それ、どこ？」

「うっ記憶が…」

「もうっ」

「冗談だ、それより今日は何を作ってくれたんだ？」

「ふふっ帰ってからのお楽しみ！」

だが家に着いてすぐ楽しい夕食（と言ってもアインに付き添うだけだけど）タイム…

とはいかなかった。

何故なら家を抜け出していた事を知った父が玄関で待ち構えていたのだ。

そしてヒトミはまたしつかりとお説教を喰らったのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481b/>

思い出(アイン×ヒトミ)

2010年10月22日00時11分発行